

第一部 〈エイリアン〉の章

(1) シルバードラゴンとの同化

「ぐ……オ、オレのし、心臓が、あ——」
わめいた中年男性の体が背広着もろとも、ふたつに裂けた。

一帯にとめどなく鮮血を垂れ流し、赤いロープ似の小腸が爆発する勢いで、裂け目から吹き出ている。引きずられる形で血みどろの臓器類があふれ始め、わめいた男性の「心臓」だけが激しく脈打ちながら、宙へ浮かび上がった。

様々な背格好の老若男女が行きかう夜の新宿・アルタ前は騒然とした状態に陥り、絶命した男性を遠巻きに囲う形で、人垣ができる。

みな茫然とした面持ちで立ちすくみ、鼓動する心臓を眺めていた——。

新入社員の竜ヶ崎将人は午前四時のサーバ・メンテナンズ業務に備え、同僚の清水アヤとレストランへ向かう途中、事件を目の当たりにする。

当初は、趣味の悪いパフォーマンスカとも思えたが、この異様な雰囲気はただごとではない！

さらにギャラリーのなかにも、もだえ苦しむ人たちが現れだした。

学生の服が破れて背中から、節くれだった脊髄そのものが引き剥がされる。

「う、がっ」

若い女性の顔が奇怪に歪み、ふたつの眼球のみが神経の尾を伸ばし、中空へ吸い上げられていく。

たじろぐ竜ヶ崎がスーツを揺らして目を見はると、視界上方にビルほどのスフィア（球体）が映った。

金属光沢のスフィアは音もなく夜空を漂い、人間の部位をかきこんでいるかのよう。

よもやエイリアンの来襲、あるいは二二世紀に蘇った魔王の侵略行為なのか!?

日ごろからオンラインRPGを管理する竜ヶ崎の頭では、荒唐無稽な内容も、現実的なものとして認識できていた。

いや、誰しもが猟奇的な事件に対し、狂ったイメージを持つていゝであろう。

しかし自分と共に、ファンタジックなイベントを考案する清水アヤも、常識から外れた考えを信じきっているに違いない。自分自身はどこか、この事態を傍観しているふしがある。

人々が逃げる間もなく、スフィアから半透明のカベが作られ、現場は出口のない密閉状態になった。むろん竜ヶ崎も、そのなかに含まれている。

彼がとつさに、小柄で線の細いアヤを守るべく

抱き寄せたところ、彼女の体も不自然な具合にうごめきだした。

竜ヶ崎が顔をやると、アヤは背を丸めて体をこわばらせ、甲高くあどけなさの残る声を響かせる。

「あたし、守るため……、一時的なドナーに……」「なに、アヤさんがドナーだって?」とたずねかけた矢先、彼女が倒れこむふう腕のなかから離れ、路上で四つんばいとなった。

ポニーテールを揺らすアヤの体は膨らんでいき、楚々としたジャケツトが音を立てて引き裂けていく。ランジェリーも破れて竜ヶ崎が初めて目にする、なめらかな素肌は新雪そっくりの白さを放ちだした。

そんな彼女がスリムに伸びる首をもたげて、細長くなった口を開いた。

「戦闘ベガスになって、惨劇を――」

アヤが臓器を奪われないよう、竜ヶ崎は長軀を

引き締め、懸命に身をよじった。捨て身でスフィアと彼女との盾となろうとしたとき、自身の背に冷たい感触が現れる。そこから電気的な刺激がおとずれ、竜ヶ崎の頭では、深い余韻のある女性的な「声」がこだました。

（すいません。いつときでかまいません。わたしのドナーとなってください）

これは自分も相手に体を貸す……ということ。

「アヤさんはすでに、ドナーになることを受け入れたのか？」

（そうです。サンプリング（データ収集）している「スフィア」を帰還させてはなりません」と相手が認め、緊迫した感じの言葉を送りつけてくる。

（ふたりは脳波の形状が……、思考パターンが我々レジピエント・ビーストと拒絶反応を示さない人間なのです）

「あなたはビースト——？」

（どうか……、お願いです。我々ならこの現状を好転させられます！）

竜ヶ崎の頭でエコーする言葉は、うそ偽りのない、懇願の響きをたずさえていた。少なくとも自分には、そう聞こえた。

ましてや言葉の主が邪悪な存在ならば許可を求めず、むりやり体を奪っていただろう。

さらにスフィアの残虐行為に対しては、同じ人間として反吐が出る思いだった。非力な自分で、事態を食いとめられるものならば……。

「わかりました」と、竜ヶ崎は周囲を見まわし、強くうなずいた。

（ありがとう。我々の末裔よ）

「え、末裔ですか？」

こざっぱりとした髪をかき上げた直後に、全身がマグマさながらに熱くなった。体中の血が滾って、筋肉はあぶくを放つかのごとく、不定形にお



どりだす。

目いっぱいまで引き伸ばされたスーツとズボンが千切れ、足は太く雄々しく膨らんでいった。粉々になった革靴の先からは、黒く怪しい光沢のカギ爪が生える。

「心」のすぐそばには別の意識を——かなり女性的で官能的だ——を覚え、これは文字どおり肉体的な同化であった。

実際、竜ヶ崎はやわらかな生肌を持つ、ほのかな温もりや、甘く切ない匂いさえ感じ始めていた。

こんな自身の視点は展望エレベーターを思わず急上昇をつづけ、スフィアが作ったカベのなかで逃げかう人々の姿が、一段と小さくなった。

そして竜ヶ崎は生涯初めて、流線型にとがった自身の鼻先を見ることとなる。すでに人の皮膚は失われ、この体は、いぶし銀のウロコで覆いつくされていた。

たてがみらしき銀色の毛も目に入る。

……ここまで力がある存在ならば、人間にたよらなくても問題ないのでは？

こう思った途端、（わたしには視野がありません）と未知なる女性の言葉が、ややぶつきらぼうに応じてきた。目が見えない……。相手は自嘲しているのか、その声は感情を伏せているふうに、冷たい余韻を持っていた。

（運動機能をつかさどる小脳の一部もないのです。本来なら死んでいた身。自力の器官だけではほとんど、なにもできません）

色々な考えが竜ヶ崎の頭をめぐる、自然と脳天に力が入った。

（それで「ドナー」が必要なのか——）

（単純に言えばそうです）と相手が応じ、頭に力を入れれば、心の言葉を伝えられる点が理解できてくる。

竜ヶ崎はすでに変身し終え、厳つく角ばった銀色の両手を呆然と眺めていた。しかし心での会話を確かめるべく、いや、なにより極度の不安感を打ち消すべく、頭へふたたび力をこめてみる。

相手はやさしそうなので、こちらをサポートしてくれるかもしれない。

(…：あなたの器官は、あのスフィアに奪われたのですか?)

(いいえ。生まれながらに持ちあわせていません。わたしたちの間ではもう、すべての器官を備えた子供は生まれないのです)

事実のみを冷ややかに聞かされ、竜ヶ崎の不安感はそのばかり。

と、ここで突然、耳障りな金属音が聞こえてきた。

頭頂部に角を伸ばす、翼の生えた白馬（アヤの化身こと戦闘ベガサスらしい）が飛翔し、半透明

のカベを突き破ったのだ。

すじ状に大きく割れた外部との隙間に、人々が脱兎となり、おしよせている。戦闘ベガサスのアヤは、なんども角をぶち当てて、カベの割れ目を広げていった。

彼女を変身させた相手は、どこに不自由をしていたのだろう。

(パルージャには三半規管が存在していません。翼はあれど決して飛べない…)と、静かな説明があった。そんなベガサスの羽ばたきははりりしく、アヤの補佐を受けた飛行も優雅だった。

はたして事態が落ちついたとき、相手はアヤの体を解放してくれるのだろうか。自分も手足や体の格好から、伝説上の「シルバードラゴン」と化しているのを見てとれる。

視線は建物三、四階程度に高くなり、筋骨ばった足を踏み出すとアスファルトが陥没し、足型状

にへこんだ。

接触している女性さながらの存在からは、体を自由に動かせるという、よろこびの感情がわずかに届いている。

もしも、この変身がとけなかつたら――。

(変身ではなく、正確にはわたしの細胞と、一時、同化していただいた形です)

相手は「一時」との言葉を使ったが正直、こんな事件との遭遇や体についての不安が高ぶってくる。

(あなたは何者なんですか?)

(わたしはエルシャーナ)

いらだしげに問いかけても、答えはそれだけだった。

しかし形になっていない相手の意思だけは、竜ヶ崎の心に強く広がっていく。そう、スフィアを野放しにはおけないと――。

肩甲骨付近に感じる重みは、たぶんドラゴンの翼であろう。力を入れてみたところ、エルシャーナがおし留めてきた。

(お話したとおり、わたしは翼を満足に動かせず、飛び方を知りません。けれど「ドラゴン」最大の武器はご存知でしょうか?)

それは十分よく知っている。

空想世界にそこがれてまた、殺伐とした世の中に、ちよつとばかりのファンタジーを提供するべく、自分はIT業界に飛びこんだのだ。

武器は毒ガスなり火炎なりの「プレス」だろう。だけど、夢と現実の境界線は残念ながら、はっきりとしている。プレスは生物学的に使えるものなのか?

すると竜ヶ崎の視界が微かに揺れた。エルシャーナがぎこちなく、首を左右に振ったのだ。相手の言葉も淡々と伝わってくる。